

浮世絵の美

その二十五

日本文藝家協会会員 各務 章

浮世絵の持つ独得のすばらしさは何か、以前にも述べたように、錦絵版画に見られる線の美しさではないだろうか。歌麿、北斎の両巨頭に見られる春画の中の顔や肢体はすべて一つの細い線で描かれている。

大首絵や大つび絵のふくよかな形態の原点は、すっきりと描かれた一本の線によって成り立っている。その線の中から、妖しい女体のなまめかしい面が現れてくる。男であれば、このような悩ましい女体を抱きたくなるような気持ちにさせられてしまう。こんな風に見る者の心を魅きつける力が、細い線で構成されている事を、もつ一度ふり返ってみようと思う。

「歌麿の毛がき彫師の泣き

どころ」という古川柳がある。黒髪の流れるような線、陰毛のチリチリとしてしかも一本一本が細密に描かれた局部。これを版画として、くっきりと彫り上げるには、余程の力量が必要であったであろう。匠の力。職人芸である。活字体の中の線は鉛で作られた印字や線の形であるため、凸版であり、線も細いように見えてもやはり厚みが残っている。それに比較し、錦絵版画の場合、木彫りの線は鋭角に彫り上げるため、あくまでも細く、髪の毛ほどの細さまでに仕上げられ、その絵の美事さが、きわ立つのである。

何度も説明しているが、女性の髪の毛やかんざしと柔らかい首すじにまつわる鬢のほつれ毛。局部のふくらみの中

に見えている陰毛の悩ましい状態。外国の春画に比べて、日本の浮世絵が、如何にすばらしいかを証明している原点である。

さて今回紹介したいのは「鳥井清長」の異色の春画「袖の巻」である。

見開きの横に長い錦絵春画の匂ってくるような画面を見る。リチャード・レイン氏による説明を引用してみよう。その一枚の絵。

「相愛の男女が田舎を舞台にエクスタシーの頂点を迎えている場面が描かれている」その舞台になっっている女性は、京都で黒木(木灰)を売り歩く大原女で、男性は木こりではなくしかるべき町なかの若者であるうか。黒木が枕がわりに使われ、女は白足袋にわらじ

を履いたままで、めくれた着物から見える交合の形は春情をそそるものがある。しかも

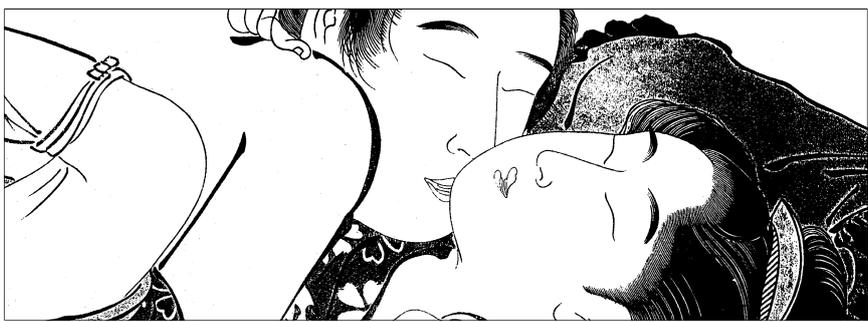
誂紳士服のタケハラ
川端通り(二七)二九八

毛彫りのすばらしさは、男性のそれと女性のでは明らかに太さと濃さに差があり、いかにも生き生きとしたなまめかしさを表現している。しかも前に述べたように女の足指は足袋をはいたまま、ぐっと内側に曲げられていて、今まさに快楽の頂点にのぼりつめた姿である。半開きの唇と閉じた眼の細い線、まだ若い額の生えぎわの髪の毛の形と、櫛をさした髪の毛の柔らかいふくらみ。実に美事なものである。

この絵の特徴は横長の版画である。たての幅が12cm、横の幅が約67cmと、異例の形式をとっている。それだからと言ってよいのが春画の基本である顔と局部をきわ立たせて描いた事であろう。

絵はあくまでも人物のその極限の表情だけを描く姿勢を貫いていると言ってしまう。

上品な振る舞いや装飾的な背景は全てカットされて、成熟した目鼻だちと陰部のリア



ルな妖艶さに集中された構成である。一見して春情を引き出す性の大首絵と言ってしまう。

この清長の春画の題が「袖の巻」であるが、実はこれは、巻物の形をしたもので、着物

の袖の中に入れて持ち歩いたのだ、とする説になっている。かつて立て形の短冊形式の絵について述べたが、横にしたものは四つ折りにした屏風の形式になったのが残されている。しかし清長のは、折り目はなく巻物形式の一幅ものであり、それが男女のからみ

の大きな表現力になっていると私は思っている。鳥井清長(一七五二-一八一五)は江戸の本屋の息子とされている。伝統的な鳥井派の重要な存在だった清満の筆頭の弟子の一人であり、鳥井家四代目を継いだ家長でもあった。

彼の前期は主として歌舞伎絵を画いていた。その写実主義の役者絵は高い評価があり、あの写楽の革命的役者絵の前に、既に一家をなしていたとされる。写楽にも影響があったとも考えられる清長の役者

絵は、その新しさと言えば舞台の役者の絵姿を、このような美男であったと観念的に描くのでなく、あくまでも現実的に写実主義を取り入れた事であろう。だからこそ写楽のあの鼻の太い異様な顔のデフォルメされた役者絵(その人物の特徴を漫画風に表現)の革命が起こったのだ、と分析している。

又清長は人物を大型化して描く手法から、美人画も多彩な形で描いていて、春画を描き出したのは後期に入ってからとなっている。彼の春画の中には、いくつかの小品がありこれらの中には二十歳の若い時期の作品もあるとの事。やはり基本はしっかりりとあったのである。

この小品の組物が「色道十二月」(一七七三年代)として残されている。清長は出生が前述したように、本屋の息子であったせいであろう。色々の出版物を知っていた筈である。その一例として「好色末摘花」(一七八四年)、濡姿三十六合撰(一

七七六年)等面白い題材の春画を描いている。又一七八五年にはその絶頂期にあつて作成した春画「色道十二番」があり、これも又評価の高いものである。八年前に磯田虎龍齋が描いた「色道取組十二番」の人物像を念頭に置いているのだが、人物の描き方に工夫をこらしている。虎龍齋のは背景が色彩豊かなのに対し、清長のは、そこを簡素化して顔や肢体を中心に、より美しく男女のからみを描いている。

この後に出した「袖の巻」(一七八五・天明五年頃)が今紹介しているように大首絵に似たような大胆な構図で、しかも優雅で悩ましい春画として成功しているのである。又清長最後の作品とされるものが残されている。清長の中で大変珍しく又最も知られていないとされるのが「今妙十二鑑」の中判の春画である。優雅な情景の中で、色情の激しさが入り交じっていて、見る者の心を溶かす迫力があるのが特色である。これについては又別の機会に述べてみたい。



さて「袖の巻」の中から三紹介しておこうと思う。若者で、たぶん相思相愛の

仲であろうか。珍しく二人とも、また陰毛が生えておらず、ういういしい性器の結合である。細長い絵巻の左端には書道の折本が、開かれたまま置いてあり、茶色に塗られた文机が見える。この場面は寺子屋であり、人のいない時を見はらかっ

ての交わりであろう。しかしあの部分はしっかりと交合しており、二人の目が細くあけられて見合っている顔も珍しい。ことは書きが無いのも想像力を湧き立たせて効果的である。もう一図を見てみよう。

振袖の新造。これは花魁の見習いとされている。この若い女に最初の性体験を教授している場面であろうか。吉原の馴染みの客が、自分の大きなもので、今から行為に入ろうとする情景である。女性は振袖で顔半分をかくしているが、眼は男性を見つめている。ふっくらした局部の陰毛が美しい。男は指先に唾をつけているのも、この場面にふさわしい。

誂紳士のタケハラ
川端通り(二七二)二九八

☆☆